

● 制作

A sense of self

～日常にある“原体験”による自己意識の探求～

山崎産湖

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 章 俊華)

YAMAZAKI Sango

1. 背景と目的

生きていくのに最も必要なのは、確固たる自己意識だと思う。「だれが何と言おうとこれが好きだ」と言えるくらいの心の張りがあれば、おのずと道は開かれる。反対に、自己と向き合わないまま、自分に適していないとも分からずに努力をすると、最終的に無気力になってしまう可能性がある。

「自己を知る体験」のことを、「原体験」という¹⁾。一般的には、幼少期の頃に経験するものであると定義される。しかし、幼少期ではなくても、日常のなかで原体験的体験をすることは誰にでも必要なのではないか。街中で、今までの自分と違う自分を知り、育み、自分と対話できるようなオープンスペースをつくる。それが、ランドスケープを専攻する学生の私が、地元高崎に還元できる方法なのではないか。

通常、居心地の良い空間というものは、自己を意識しないで済む空間といえる。だからこそ、自己を意識でき、かつ居心地の良い空間を考える必要がある。高崎なら特に、あくまでも街にある公園として馴染む形にする必要があると思った。

すなわち、当制作の目的は以下である。地元高崎の街中で、誰もが、自己意識をブラッシュアップすることのできる、居心地の良い公園のデザイン提案をする。

2. 対象地の調査と分析

群馬県高崎市高松町にある約2haのイベント用広場「もてなし広場」である。当広場は、群馬県最大の駅・高崎駅から徒歩13分ほどにある。烏川の対岸地帯を繋ぐ和田橋の直線道路と、高崎駅西口に向かう主要道路が交差する場所に位置する。よって交通が最も激しいエリアといえる。当広場では多くて月に数回、何らかのイベントが開催される。しかし、普段の利用は、ほぼ皆無である。緑が少なく、文化財のお濠も近づきたい。近道として当広場内を通る自転車さえ少ない。周囲はセカンドプレイスに分類される施設に囲まれており、寄り道できる商業施設や、新しく綺麗な公園はない。

すなわち、アクセスの良さに対して利用がほとんど無いことが惜しい場所である。そこに、会社や学校帰りに寄って、自己意識をブラッシュアップできるような綺麗な公園があったら、この地域にとってより価値ある場所になると考えた。

3. 制作提案

(A) 自己を見つける・育てる原体験と、(B) 自己を振り返る

原体験をつくる。当広場中央に、川幅が徐々に太くなる円形の川をつくり、その流れに沿うように、自己意識のレベルごとにシーンを展開する。

(A) 自己を見つける・育てる原体験

A-1 【様々なかたちの岩群】

人によって様々な身体をもって、特有の関係性のなかで生まれたことが既に唯一の存在である証明だということを確認する。

A-2 【岩畳】

どうやったら安全に遊べるか、他人を傷つけないか、自分の力で模索する。

A-3 【目には見えないもの】

目には見えない風景の一部分を想像する。それは、目には見えない他人の心を想像することに似ている。自己を成長させる、最も尊い心の働きなのではないか。

A-4 【ランウェイ】

主人公的体験。自分を主役に感じる事が少ない日常生活に、多年草や季節の樹木で彩りを。

A-5 【ステージ】

他人に誇れる自分だけの輝きのモチーフ。また、輝く他人を好きになれることも素晴らしいということ。(実際にステージとして利用することも可能。)

(B) 自己を振り返る原体験

B-1 【わたしとわたし】

自分と全く同じ姿の身体と直面するかのような風景。(A)で見つけて育てた自己意識や、普段生活している中で見逃していた自己意識を、自分自身と対話しながらもう一度心の中で整理する。

B-2 【地域の人々】

樹冠と地面の間を行き交う地域の人々の身体性が際立つ。地域の人々と比較し、自己を振り返る。他の人と違う、確固たる自己意識が磨かれたことを確認する。また、地域の人々にとっては私も地域の人々の1人である。同じくこの街で生きる仲間である。この公園の奇妙さを共有する仲間である。

4. 参考文献

- 1) 感性の哲学 桑子敏雄 著
- 2) 君たちはどう生きるか 吉野源三郎 著

